

---

# マジック × 2

蟹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジック×2

### 【コード】

N0399E

### 【作者名】

蟹

### 【あらすじ】

元クリスタルオーブソルジャーのシンは異世界に飛ばされ、マリ  
ーの奴隷になるラブコメファンタジー

## 第一章

奥深い森、

「ハア…ハア…」

敵と見られる兵士は火で燃えた森の中を走っている  
すると、巨大な大剣を持った青年が兵士の前に立つ

「ヒッ！！」

「…どうした…？何を脅えている…？それでもクリスタルオーブの  
隊長か？」

クリスタルオーブは世界一とされる軍隊のこと、青年はその世界一  
のクリスタルオーブを一人で隊長を追い詰めている

青年は一步步、隊長に近づく

隊長は一步步、下がる

青年は背中にある大剣を持ち、一步步、近づく

「や…やめてくれ！殺さないでくれ！頼む！元クリスタルオーブソ  
ルジャー！シン！」

青年の名前はシン、元クリスタルオーブのソルジャーをやっていた

「今更命乞いしても意味がない…」

シンは隊長に近付き、大剣を高々と、上げ、隊長を斬った

隊長は両膝を着き、倒れた

「今のは、アンタに殺された人々の恨みだと思いな…」

そう言つて大剣をしまった

すると…

シンの周りに光が集まった

「なんだ？」

シンは光に包まれ、その場からシンがいなくなった

シンには光で前が見えなかった

すると光がなくなった

「ここは…？」

シンがいるのは庭のような場所にいた

シンの周りには人が集まっていた

「えっ！？人を召喚しちゃった！」

シンの前に女の子が立っていた

女の子の髪はカール状にまいて、身長は140センチ後半、手にはステッキを持っていた

「誰だ？アンタ……」

「アタシはマリー・バレンタインよ、お前は？」

「……シン、シン・カミムラだ……」

「そう、これからお前はアタシの奴隷だからよろしく」

シンは嫌そうにこう言った

「断る」

「なっ！？……何でよ！？」

「何で見知らぬ奴に奴隷扱いされなければならないんだ、それにアンタ強いのか？」

挑発的な態度をとったシンに対してマリーは、

「あ……当たり前じゃない！！お前なんかより強いわよ！！！」

「……あっそう、」

とそっけなくするシン

「とりあえずお前はアタシの奴隷だからね！わかった！？」

「……興味がないね、」

「なっ！？何てひねくねた奴なの……！！！」

「なんだあゝ？召喚獣とケンカしてんのかあゝ？」

偉そうな少年がマリーを茶化してきた

少年はブライアン・スコッタ、三本の指に入る最強の魔法使いの貴族だ

「ブ……ブライアン……」

流石の強気なマリーもブライアンには頭が上がらない

「……誰？アンタ……」

「コイツはブライアン・スコッタ、三本の指に入る最強の魔法使いの息子よ」

とマリーはシンに教える

「なんだあゝ？てめえゝ俺様にケンカ売ってんのか？」

「…自意識過剰にもほどがあるな」

それを言われたブライアンは切れた

「死ねえ！！ゝファイラゝ！！」

大きな炎の弾がシンに向かった

すかさずシンは大剣を持ち、炎の弾をマップタツに斬り、ブライアンに刃を向けた

「…アンタ…弱いな…それでも三本の指に入る最強の魔法使いか？」

ブライアンはヘナヘナと腰を抜かし、じべたに座り込んだ

「強い…ゝファイラゝをマップタツに斬るなんて…アンタ何者なの

よ…？」

「…言いたくない」

シンは剣を直し、ブライアンに向かって、

「正直、その歳でゝファイラゝを撃てるなんて思いもしなかった…

アンタはいい魔法使いになれるよ」

そう言つて寝転んだ

「ちよつと…シン何を…」

「…寝る、」

シンは物の五秒を立たずにスーサーと眠りに着いた

「…どうやってシンをはこぼうかな？」

次回に続く

## 第二章

「ふううやつと運べた…」

やつとのことです。シンをマリーの部屋に運んだマリー

シンを運んだせいにか、マリーは部屋の中にあるソファアに座る

「それにしても大きな剣…」

そう言つてマリーはシンの剣を持った

「…!!? 何この剣!? 凄く重たい!!」

剣を持ち上げようとしますが、重たくて持ち上げられなかった

「…何してる?」

シンはマリーの大声で起きた

「アンタの剣…何キロあるのよ…?」

「70はあるな…」

「70!? いくらなんでもこれは重たいわよ!」

「…それだけ思いが籠ってるんだよ…」

そう言つて剣を片手で持ち、直す

「…腹が減つた…」

時刻はお昼頃、シンはお腹を空かし、へなへなとソファアに座る

「じゃあご飯作るわ、待つてて、」

「なるべく早く作つてくれ…」

マリーはキッチンに向かい、冷蔵庫を開けた

「うゝん…今日はオムライスでも作るのかな?」

マリーは卵と、人参、玉葱、鶏肉を出し、調理を始める

「…寝るか…」

シンはまだ眠気があつたため、ソファアに寝転び眠りに着いた

それから20分、

「…きて…シン…」

「うゝん?」

「起きた?」

「ああ……」

「そう、出来たわ。食べて」

そう言ってシンの目の前にあったのは…グロテスクかつ、暗黒物質的なものが皿の上に乗ってあった

「おい…マリー…」

「何？」

「これは…何だ？」

「オムライスだけど？」

「…新手的イジメか？」

「？もうイジメじゃないわよ」

シンはこれはイジメだと心の中で悟った

「…いただく、」

パク

「ドキドキ…」

ドキドキさせるマリー

「…美味しい」

「ホントに!？」

身を乗り出し、シンに近づくマリー

「見た目はグロテスクだが中々の味だ…いい嫁さんになるな…」

そう言ってシンはオムライスをパクパク食べる

「やだあ…シンのお嫁さんだなんて…」

マリーは妄想癖があり、見た目はクールかつ、何でもこなせるパー

フェクトウーマンだが中身は少し痛い

「…オレの嫁さんとは言っていない…」

直ぐ様現実に引き返されたマリー

「まあ…おいしいには代わりはないわね、」

マリーもオムライスを食べる

「…ご馳走様…うまかったぞ」

「お粗末様でした、ホントにおいしいかった？」

「ああ…うまかったぞ？」

「うふふ…ありがとう」

嬉しそうなマリー

「？」

状況が掴めないシン

「お風呂入る？」

「ああ…」

「それじゃあお風呂はあそこの扉を開いたらあるからね？」

「わかったよ」

そう言っつてシンはお風呂に向かった

チャプーン

「…気持ちいいな、やっぱり」

シンは大の風呂好きでよく温泉とか銭湯に行くほどだ

「…出たぞ？」

「気持ちいい良かった？」

「…ああ…」

「じゃあ入ってくるね？」

そう言っつてマリーは脱衣所に入っつていった

「…剣でも磨くか」

シンは剣を磨き始める

コンコン、

「…誰だ？」

シンはドアを開けて確認した

すると一人の女の子が立っつていた

見た目は明るいオレンジの髪で腰まである

身長は160センチ辺りある

「あれ？部屋間違えちゃったかな？」

「…誰だ？アంత」

「僕？僕はイース・クラリオンだよ？よろしくね？」

「…男か？」

「何で？」

「…僕って言っただろ？」  
「失礼な！僕はちゃんとしたレディーだよ！」  
「…それは悪かった」  
「分かればいいんだよ…ってかマリーちゃんの部屋ここだよね？」  
「…そうだが？」  
「てか君は誰？」  
「…シン・カミムラだ」  
「じゃあシン君って呼ぶよ！」  
「…わかった」  
「所でマリーちゃんは何？」  
「…マリーは今風呂に入ってる…立ち話も何だから入ってくれ…」  
「そうだね！お邪魔しま〜す！」  
シンは元気なイースに対し、コイツとは仲良くなりたくないな…と心の中で悟った  
「あれ？イースどうしたの？」  
マリーは風呂に出てきた  
「あっ！マリーちゃん！遊ぼうよ！」  
「何して遊ぶの？」  
「う〜ん…隠れんぼ？」  
シンは小学生か…  
と口には出さずに心の中で突っ込んだ  
「…マリー」  
「何？」  
「…眠たいから寝る、晩飯になったら起こしてくれ」  
「わかったわ」  
そう言っつてシンはソファに寝転び、眠りに着いた

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0399e/>

---

マジック×2

2010年10月9日22時32分発行